

# ねこの みこの

猫 藪 通 信

第 28 号  
平成 九年  
(1997)  
7月15日 発行  
(年 4 回 発行)

## 世態人情諷交詩

東 明 雅

昭和初期、高浜虚子によって唱えられた花鳥諷詠論は、爾後ホトトギス派の俳句の根本理念となり、また、これに対抗する新興俳句運動を引きおこす契機ともなり、相俟って今日の俳句全盛時代を招来した。

花鳥諷詠とは、「花鳥諷詠と申しますのは、花鳥風月を諷詠するということで、一層細密に言えば、春夏秋冬四時の移り変りに依って起る自然界の現象、並びにそれを伴ふ人事界の現象を諷詠するの謂であります」（「虚子句集」自序）と虚子自身が言っている通り、その中に人事界の諸現象も含んでいるのであるけれども、それはあく迄四時の移り変わりによっておこるもので、主体は自然界の現象であり、月・雪・花その他、自然の風物を詠むという事であり、この詠み方の背後に写生

説がある事も周知の通りである。

右に倣って私は現代連句の根本理念を考えたいのであるが、これには芭蕉の俳諧における根本理念を再吟味することから入るのが捷徑であろう。私が正岡子規の連俳非文学論を読んで納得出来なかったのは、その前に、芭蕉の俳諧、ことに「冬の日」・「猿蓑」・「炭俵」の名作を数々読み、感動していたからで、このような作品をもつ俳諧が、どうして文学であり得ないのか、私は未だに分らないのである。

ここでは「猿蓑」の中の「市中は」の巻を取りあげ、その根本理念を探ってみよう。

ご承知の通り、この作品は発句以下、市中の雑踏から田園へ、そして山間僻地へと情景が推移し、その中に市民・農民・旅人など、さまざまな生活が描かれている。裏に入ると柔媚な恋の句と暗鬱な述懐の句が交錯し、変化に富んだ人世の種々相が描かれる。名残の表になると、小市民の貧しい生活の相が続くが、折端近くになって、隠者の風狂の生活に変わり、名残の裏の王朝古典の世界に続いて有名な「浮世の果は皆小町なり」の絶唱となる。三十六句の中、純粹な自然描写もないではないが、それは四、五句に過ぎず、それらも、前句の会釈、あるいは遁句に用いられる場合が多い。

このように、俳諧は叙景より抒情が中心で、さまざまな庶民の実態を描いているが、また、

末摘花・西行・小町などを面影にした句もあって、要するに人の世の虚実を連衆が詠みあい、付け合っているものである。

「芭蕉翁附合集評註」という本の中で、佐野石兮が「すべて俳諧は第一人情世態にわたらざれば、あはれなる事をかき事をいひ出づる事かたし」と言っているが、その通り、俳諧とは人世の虚実（世態・人情）にあはれとをかしを見出して詠み、その句にまた付句をし合うものなのである。俳諧は発句を除けばあとはみな付句である。その付句はみな人世の虚実を描くのであるから、写生だけでは間にあわず、想像力あるいは創作力を重視しなければならないのは当然であろう。虚実の論はすでに談林俳諧の時代から登場し、蕉風俳諧にも継承され、発展した。これを体系化したのが各務支考で、表現における虚の尊重を説いている。

私は俳諧の根本理念を右のように考え、「世態人情諷交詩」とした。あるいは「人世の虚実諷交詩」と言ってもよい。

そして、この理念は芭蕉の俳諧の伝統をうけている現代連句の根本理念としても、過不足のないものと考ええる。

冒頭にも述べたように、花鳥諷詠論の提唱、及びそれに対抗する新興俳句の勃興が、現代俳句を隆昌に導いたように、私の「世態人情諷交詩」論が、現代連句界に一石を投ずる事になれば幸いである。

## 西鶴と高校教師

鈴木千恵子

学部の学生の頃から、西鶴の浮世草子について研究を続けている。

今は富山大学で教壇に立たれる、私の先輩の二村文人氏に「西鶴を勉強するならば、連句をやらなくては」と騙されて(?)当時関口芭蕉庵に連れて行かれたのが、私とその出会いだっただけ。

「騙されて」と書いたが、もしそうだったとすれば、これは私の人生の中で最も幸運な騙され方だったと言えよう。明雅先生を初めとする多くの方々との縁が出来たのだから。

さて、その後私も高校の教壇に立ち続け、西鶴の研究も細々と続けているうちに、連句は趣味として(?)すっかり面白くなってしまった。高校生の教育に携わるといふことと、西鶴の研究を続けるということと、連句教室に通うということが自分の中でどのように結びついているのかというと、あまりいいような気もするが。

とりあえず、高校生に連句の実作を試みさせることにした。『冬の日』の「夏の月」の巻の表六句を読んだあと、「山路来て……」を発句に立てて、脇起りに入った。連句の実作と称しながら、連想ゲームのごとく観音開き、輪廻にとらわれている実践が多いように

思い、転じを重視した。式目も尊重した。多くの式目は一巻をより変化に富んだものとするための制限であって、その枷を打ち破って想像力を極限まで働かせるところに、連句の知的「遊び」たる所以があるからだ。三年次の選択授業の国語表現の一環として行ない、受講者が二十数名と一般の授業よりも少人数であったため、和氣藹藹と進めることが出来たのではないかと考えている。和室での歓談も交えての中で、「座」の雰囲気も味わってもらえたかとも思う。「連句」という文芸形態に、彼らが触れたことを心の隅に憶えておいてくれればと願っている。作品をまとめて掲げておく。

脇起り「山路来て」 千恵子 捌

山路来て何やらゆかしすみれ草 翁

ふはふはひらり舞へる初蝶 剛

雛の宴笛や太鼓も軽やかに 洋一

隣の家に入るこそ泥 真一

金色の鍵穴照らす月明かり 保恵

榎櫃のジャムを瓶にいっぱい 千恵子

を趣向した。句作りはふはふはひらり」と自解している。

第三は「雛の宴」を句材としてこちらから提示した。

四句目の原句は「隣の家に入る盗人」であった。「盗人」は表六句には穏やかでなく、一直した。「こそ泥」としたところで大胆な付け句に変わりはないが、前句の賑やかな雛の宴に対して隣家にはこそ泥が忍び込むという、俳諧味のある面白いものとなったのではないだろうか。

五句目。こそ泥から鍵穴を連想した。そこに繋がりがあいながらも、鍵穴の先にある無限の未知のものを予想させ、新たな展開を暗示している佳句であると思う。

六句目は私が付けた。月明かりのさすキッチン辺りで、ジャムを瓶いっぱい詰めているのである。手作りのジャムを明かりに透かしたりしているかも知れない。それは深みを帯びた黄色の輝きであろう。一新しみを持った素材を取り込んでみた。以前、明雅先生が「榎櫃はジャムになるかねえ」とおっしゃっていたが、その後諏訪の温泉で売っているのを見かけた。お土産にお

持ちすればよかったと、気の利かない私が気付いたのは東京へ帰ってからだったのである。

(高校教諭)

第一回藤浪俳句会抄（報告）

権頭 和弥

亀戸天神社の、ある紹介記事の中に、次のように書かれているコラムがあった。

「神苑の心字の池畔一面に咲き馨る藤の花、人々は、太鼓橋からの景観を『亀戸の藤浪』と称え、房の長さを、『亀戸の五尺藤』と賞めそやし、杖を引く人、跡を絶たず、踵を返し亀戸の藤に遊んだ」と。

この度、第一回藤浪俳句会の、藤浪“の命名には、主催者亀戸天神社の思いが籠められているといえよう。第一回亀戸天神社句会・藤まつり俳句会でも無い「藤浪」に表される、古来からの「藤」の天神故のこだわりと第一回句会開催へのご熱意が伺えて快哉。今年、五月二日、花房も豊かに、藤浪俳句会に相応しい日に恵まれて開催された。

当日参加された方達、四十三名、それぞれの「席題」「百千鳥」の句作りに思いをいたされ神苑に散っていかれた。以下席題入選句の紹介（紙面の関係上「藤」のみ）

「藤」

小澤實先生選（俳誌『鷹』編集長）

特選 神鈴の音のたえずよ藤祭 篠原達子

入選 一房の藤がゆるれば皆ゆるる 小柳令子

咲き切って豆ちらほらと藤の花

小島ちづ子

藤咲いて天神の亀育ちすぎ 高橋より枝

藤揺れて祢宜の袴の軽やかに 井上僖子

老樹なほ尺余の藤の房ゆらす 三代沢孝

式田和子先生選（俳人協会々員）

特選 老樹なほ尺余の藤の房ゆらす 三代沢孝

入選 藤房や風にうねりを高ぶらす 段原羊子

太鼓橋より江戸絵図の藤を見る

山田聖東花

もつれたる口説文句や藤の姫 中川哲

夕藤やおのがじしなるデイパック

浅賀淑代

べつびんも死語となりしや藤まつり

吉田ゆきゑ

東明雅先生選（俳人協会名誉会員）

特選 道聞いてより道連れの藤日和

斎藤良風

入選 大吉のみくじ財布に藤まつり 倉持彬子

藤揺らす風届きをり兆民碑 生駒清三

藤揺れて祢宜の袴の軽やかに 井上僖子

くまばちの結果なして藤香る 権頭克子

老樹なほ尺余の藤の房ゆらす 三代沢孝

「百千鳥」（特選のみ）

小澤實先生選

特選 静けさに神の大樹や百千鳥 入澤一陽

式田和子先生選

特選 捨舟も園の一景百千鳥 伊藤とく

東明雅先生選

特選 金婚の旅の山坂百千鳥 入澤美紗女

◎兼題の部（各七十七句投句中特選六句）

「入学」

小澤實先生選

特選 百姓になる志入学す

八代 嫺

式田和子先生選

特選 移る世を託す身の丈入学す

入澤美紗女

東明雅先生選

特選 入学と添書ちさき内祝

式田香里

「東風」

小澤實先生選

特選 東風に佇ち少年すでに男の香 百武冬乃

式田和子先生選

特選 研師来て水を乞ふるや桜東風

久保田庸子

東明雅先生選

特選 軟東風やゆらりと伸びる象の鼻

下鉢清子



\* 私の理想の挙句 \*

花ははや残らぬ春のたぐくれて  
瀬がしらのぼるかげろふの水

◇ 花の句との見事な調和が嬉しくなる。思  
い出を大事にする年齢を迎えると、夢のまた  
夢などの言葉が身にしみる。見ず（水）に終  
わった此の世の諸相に未練のかげろふを立た  
せながら、最期はすべて瀬音と共に洗い流さ  
れゆく定め、さりげない叙景の背後に爽やか  
な余情を感じて、続猿蓑の「八九間雨柳」の  
挙句は私にとって理想の愛唱句である。

（峯田 政志）

『 花句と挙句の一对に情感があり、読んで  
満足という挙句があります。余情を受け、し  
かも一巻の鎮めになっている。並みの腕では  
無理のようです。

真夜中に花散りかかる絶間なく きよみ  
黙って閉す春愁の門 明雅

捌きの時は、あまり濃い句はとらないとい  
う自己規制があり、めでたく巻上げようとし  
て新鮮さに欠けてしまいます。挙句の工夫に  
はまだまだパワーとスピードが必要だと、し  
みじみ感じています。

（椿 紀子）

# 「挙句は一巻の成就をよるこび、あっさ  
りと詠むべきもの」と明雅先生の『連句入門』  
にある。あなたが捌の時にはどんな挙句を探  
るかと同問われれば、当然のことながら花の句  
を引き立てるものと先ず答えるだろう。そ  
して何より安らかな気分をもち、伸びやかな  
広がりを感じさせる句が望ましいと思う。

実際には、挙句は時間的制約もあり、無難  
な句を付けてしまいがち。蝶、鳥、風船、虹  
など、素材もマンネリに陥りやすい。

「使ひこまれた古き種桶 弘子」過日ご一  
緒して感じ入った挙句。この含蓄を学びたい。

（高瀬 美保）

§ 一巻の最後になって障るところが何もし  
ない挙句とはどんな場合も難しい。欲を言ふな  
ら知的な句よりも、感覚的な句であっさりとし  
締め括ることが望ましい。出来ることならい  
はゆる後味のよい挙句を付けてみたいと願ふ。  
猿蓑集『市中は』の巻

手のひらに風這はせる花のかけ 芭蕉  
かすみうごかぬ昼のねむたさ 去来  
花見頃に活動し始める花見風を掌の上に這  
はせて遊ぶと、霞を動かすほどの風もない眠  
気をもよほす春昼。その付味の絶妙さ。

あはれ、しをり、かなしみ、の一巻と言へ  
る『市中は』の見事な挙句だと思ふ。

（村田 富美）

連句とのかかわり

服部 彰宏

私が連句の存在を知ったのは、数年前パソ  
コン通信で知り合った人の家で、ルールもわ  
からぬままボールペンと短冊を持たされた時  
でした。俳句は小学生のころ宿題で無理矢理  
作らされて以来ご無沙汰なので、ドキドキし  
ながらも何事も経験という軽い気持ちでその  
場に混ぜてもらったところ、参加者全員で句  
を出し合い仕上げていくところや話の流れな  
どをととも面白く感じました。しかし短い文  
字数で言いたいことを適切な言葉で表現する  
という難しさにウンウン唸った挙句ほとんど  
何もしないまま終わってしまったのでした。

その後、パソコン通信上の連句に見まねで句  
を出してはみましたが、難しさと自信作が見  
向きもされない事、その理由が理解できない  
事等からどうしてもとっつきにくく感じてい  
ました。今年になり基本的なことから習いた  
いと思ったところに丁度ACCで連句入門の  
講座があるという話が聞こえてきたので参加  
させて頂くことにしました。教室ではわかり  
やすく教えて頂き、新しく知る事ばかりでと  
ても楽しく、時間中ずっと気が抜けません。  
まだまだ習い始めて数ヶ月でわからないこと  
が沢山ありますが、これからも楽しく勉強さ  
せて頂きたいと思っております。

亀戸天神社藤祭り奉納正式俳諧

藤祭り奉納俳諧興行

二十韻「美しき日和」 東明雅 捌

二十韻

次第 役割

一	席改め	宗匠	中田あかり
二	席入り	脇宗匠	市野沢弘子
三	配硯	副宗匠	大窪 瑞枝
四	献花	執筆	豊田 好敏
五	執筆登場	知司	峯田 政志
六	文台捌	副知司	梅田 利子
七	知司挨拶	座配	橘 文子
八	俳諧興行	座見	八角 澄子
九	花前	花司	蒲原志げ子
十	玉串奉献	配硯	八代 婿
十一	花の句披露	々々	五味 蓉子
十二	端作り	々々	椿 紀子
十三	吟声	老長	坂本 孝子
十四	文台返し		
十五	作品奉納		
十六	知司挨拶		
十七	退席		

平成九年四月二五日  
於 亀戸天神社

藤祭文台袖の晴れ姿

亀鳴く声を記す水莖

春疾風離陸を待てるジャンボ機に

和洋の銘酒箱に収まる

ふりむくもふりむかざるも朱夏の月志げ子

テラス横切る美しき脚

弓の技特訓中のキューピッド

人質解かれほっとする日々

髭剃りを充電式に買ひ替へて

有機野菜がわれの活力

防犯のカメラにしかと大狸

やがて歳暮も来なくなるなり

乱調の弦に恋しさつのらせぬ

御簾より漏るる衣擦れの音

箒星三五の月に潜めける

煎じ薬とサフランを乾す

初穀に蝗を飼へば愛らしく

大川端に鬘鑠の杖

咲き競ひ色の深まる花の奥

次の世紀にかかる初虹

明雅

孝子

瑞枝

文子

政治

利子

紀子

蓉子

婿

弘子

澄子

英子

碧

守男

道子

水壺

正子

あかり

執筆

美しき日和賜はり藤祭り

亀鳴く声を待って丹の橋

いかなごをつまみに語りきりもなし

卓にころがる麻雀の牌

月寒し楽屋泊りの旅一座

店を持つまで君はおとうと

上人にうなじ細しと抱かれて

この世の事はとにもかくにも

石鹸で洗ひ落せぬ悔いもあり

チャビンデワンダルゲリラ殲滅

犬駆けて鳩吹く子らのならぶ丘

夜毎々々に丸くなる月

中汲を提げて思はずにつこりと

スキンヘッドで褐色の彼

マリファナを見せられコギャルナンパされ

舟番小屋にひびく雷

大切な皿をこはして河童なき

だれか止めてよやけの大ぐひ

エアロビクス一途に花の二十年

虚を突の中蝶のひらひら

明雅

路子

正子

美代子

文人

佳乃子

同

路

人

路

人

美

正

美

佳

路

正

佳

美

平成九年四月二十五日 首尾  
於 亀戸天神社

平成九年四月二十五日  
於 亀戸天神社

連衆 倉本路子 小原正子 山田美代子  
二村文人 染谷佳乃子

二十韻「藤波」

今宮水壺 捌

二十韻「藤白し」

岩井啓子 捌

二十韻「藤の影」

小野シズ 捌

浮寝せむ光あまねき藤波に

よき夢醒ます遠き囁

さより旬一尾千円刺身にて

厨手伝ふ姉と妹

驅け上る嵐が丘に宵の月

牧師にぞっこんホリークロステイ

行く秋のかたみの嘘が歩きだし

もみ消し不能原子炉の火は

やけ酒をぐいと升から引っかけて

ねんねこの嬰の目玉ばちくり

初めての雪を見た日のインド人

ベントツ仕立てて通ふ温泉

医心房老猿に効く処方なし

ちちんぷいぷい玄のまた玄

月涼し女身を系がく大画面

すててこの紅落としかねたる

すいちよると訛って云ひしこともあり

食後のココアミルクたっぷり

カラオケの散るも散らぬも花の宴

どこで終るの春の夕べは

藤白し先一寸を水の中

お玉杓子の増えてゆく数

春の炉に茶筌さばきも軽やかに

国際電話声の明るく

巴里祭に唄へば月の顔出して

シヨートパンツの似合ふ細腰

美人局ほどよき頃をみはからひ

浮棧橋に解ゆらゆら

主義主張もたぬ私は風見鶏

オークシヨンにてワイン落札

比叡より底冷のくる先斗町

念仏堂にささめ雪舞ひ

戦線のキャパはカメラに愛をこめ

夢で逢ふ夫いつも壮年

いくたりの男を食ひてすさまじく

発掘遺跡月のあまねし

糞虫の謎の深さはこれくらい

バスデーキーキ立てる蠟燭

楽焼の出来ばえ比べ花明り

猫のたはむる緑ののどらか

藤の影ゆるる水面や太鼓橋

群れてうららか甲羅干す亀

級会お白酒など食前に

セピアの写真懐かしみつつ

家移りのその夜に眺む大き月

ひそひそ話萩の下蔭

相撲取りデートの時は身を細め

脳死問題記名投票

熟睡子へ次の世紀の夢託す

涼しく仰ぐガウディの塔

巧みなる野外演奏流れ来て

小首傾け犬も聞き入る

ホリデーの一坪農園賑はひぬ

やたらに名刺配る革ジャン

寒月の照らす安宿忍び逢ひ

山の斜面に羅漢しづもる

安らぎはひとり楽しむハーブティ

ぼろを厭はず釣りのあけくれ

洛北の枝垂桜の花の艶

遠き地平に陽炎の立つ

平成九年四月二十五日 首尾

於 亀戸天神社

連衆 式田和子 古賀一郎 青木泉水

大島洋子

平成九年四月二十五日 首尾

於 亀戸天神社

連衆 下鉢清子 五味蓉子 木村真呂

蒲原志げ子

平成九年四月二十五日 首尾

於 亀戸天神社

連衆 東郁子 内田麻子 佐藤良彌

和田順子

二十韻「宮の水」

加藤道子 捌

二十韻「三代」

久保田庸子 捌

二十韻「千年の智恵」

坂本孝子 捌

藤咲くや斎き守り継ぐ宮の水

半眼半覚鳴き出る亀

春暖炉新車カタログめくりみて

たばこ買ひ置く税の値上がり

夏の月海へなだるる雲迅し

みやらび織りて贈る芭蕉布

安室似のうしろ姿もいとほしく

バンド楽士のくぐる裏口

モンマントル売れぬ絵描のいつか顔

雀ちよんちよん日だまりの中

葱白菜盗み酒もすちゃんこ番

姐さんの裾どうも気になる

頑張れと胸上げされてハネムーン

出発進行こまち追ふ月

ななかまど七つの蔵何ねむる

初儀あむ爺も逝きたり

非番にはマウスクリック駐在さん

ブルーマウンテンほっと一息

峠道乙女桜の花盛り

蝶と遊べる童の帽

\*みやらび・・・沖繩の言葉「美女」

平成九年四月二十五日 首尾

於 亀戸天神社

連衆 大窪瑞枝 篠原達子 近藤守男

秋山志世子

三世代下町に住み藤まつり

会釈してくる反橋の蝶

夏隣車内ポスター替へられて

ヘッドホンよりもるるシャンソン

月高し山開き待つ人の群れ

すれ違ひざま匂ふ香水

キャンパスの師弟の溝が哀しすぎ

脳死は死亡決めたるは誰

新聞をいっさい読まず茶碗酒

棟から梁へねずみ駆け抜け

柔道着きちんと畳み寒の入り

滑子汁吸ふ亜米利加の客

プロポーズ巻毛のつむじ探りつつ

あなた彦星あたし織姫

小鳥らの眠り守れるお月様

身に入むばかりハープ奏でる

ふるさとを忘れしままに五十年

隠したる鍵ふいと現れ

集ひ来て花の館の夢の宴

暮れかぬる頃猫を呼びをり

平成九年四月二十五日 首尾

於 亀戸天神社

連衆 佛淵健悟 日高玲 市野沢弘子

吉村あみこ 中野昌子

藤房や千年の智恵授からん

亀の甲羅も麗らかな池

炉塞の茶室の畳拭ひみて

ディナーのベルを鳴らす母さん

忘れられし砂日傘あり月の下

馬走りだす夕立の後

野伏せりの髻嫌がるも初めだけ

抱けば笑ふ寝台の撥条

田沢湖は人情厚く湯も熱く

雪しまくなり旅びとの墓

寒鼻六つの星の青光り

オリンピックの準備始めん

忙しく門前町に蕎麦を打つ

向ひの席は隣よりよし

月浴びてあまのうずめの石舞台

冷えたる肩に絹巻きてやり

想い出の恋かそけくも雁渡る

ラマーズ法を聞きしあの頃

花蔭の博物館の羅針盤

初虹かかる南国の空

平成九年四月二十五日 首尾

於 亀戸天神社

連衆 近藤蕉肝 デイイー・エヴィツ

ジム・ケイシャン 中島啓世

浅賀淑代

二十韻「藤房の」

真田光子 捌

二十韻「藤影や」

長崎和代 捌

二十韻「待つといふ」

松本碧 捌

藤房のたゆたふ池の面かな

光子

藤影や首のびきって亀の池

和代

藤浪や待つといふ刻ゆるやかに

碧

太鼓の音の響くのどらか

嫺

柔東風の中渡る反橋

淳子

東風の優しく撫牛の背

利子

巢立ちする雛の行方を見守りて

安子

凧作り大きさ競ふ子等ならん

久美子

春障子脚長き児は膝つきて

文子

詰襟姿似合ふ少年

英二

地球儀廻し旅の相談

英子

レシピどほりに掲げるドーナツ

曉巳

バンガロー風吹き抜けて月明し

あかり

森閑と国際フォーラム夏の月

政志

福音書異国の人と月を浴び

紀子

灯にすがり居る薄翅かげろふ

澄子

白服を着ていそぐ逢引

好敏

あんにゃもんにゃの鴟の早技

同

好きといふ言葉大事に抱きしめ

り

手相見の通り運ばぬ恋に焦れ

久

落花生のやうに誰かと暮らしたい

利

螺旋階段裏のあやまち

嫺

いきなりエンドリマの人質

志

脱け殻同士殻脱いで燃え

巳

談合のフィクサー役の赫ら顔

英

ミサ曲を静かに歌ふ老姉妹

英

高速道超スピードの四輪駆

文

しがらみ無くて暮らす気楽さ

安

座椅子に憩ひふかす細巻

淳

タイガーウッズ白き歯の笑み

同

水ナオ下魚汁ぐつぐつ煮立て酌み交す

嫺

雪女郎すすめるままに歪すこし

敏

青島産麦酒は泡を立てぬとか

紀

泣き虫ぬか探すなまはげ

澄

俄然お喋り止まぬ村長

志

詩を吟じつつ納涼の橋

文

不意打にどきんと襲ふ不整脈

安

所在なく土間の小犬が足をなめ

淳

面影の母に似たとと鬼女を恋ひ

紀

浮気の夢の覚めて冷まし

英

おぼこの臍を舌でころがす

敏

とぐるを巻いて落ちる細帯

利

きぬぎぬの月は涙にぼんやりと

澄

月出でてあれはやっぱりひとの妻

淳

凍空に北斎の月浮かび出て

巳

清水観音紅葉の濃き

光

鏡に縛の残る夢二忌

志

引越しの荷に消えしへそくり

文

通販のカタログ配るアルバイト

り

知らぬ間に喉のポリープ消え去りて

英

携帯の電波届かぬ山里へ

紀

一期一会の句会和める

安

競歩ジョギングかはるがはるに

久

慈悲遍満の六地藏さま

利

完投の投手の浴びる花吹雪

嫺

遙かにもうねりてつづく花の尾根

同

ぼんぼりに花の吹雪の濃く淡く

巳

「老人と海」読みて遅き日

澄

春の暖炉に集ふ連衆

敏

香り楽しむ蛤の椀

執筆

\*おぼこ・・・ぼらの子

平成九年四月二十五日 首尾

於 亀戸天神社

連衆 八代嫺 神谷安子 日高英二

中田あかり 八角澄子

平成九年四月二十五日 首尾

於 亀戸天神社

連衆 上月淳子 副島久美子 佐古英子

峯田政志 豊田好敏

平成九年四月二十五日 首尾

於 亀戸天神社

連衆 梅田利子 橋文子 島村曉巳

椿紀子



## 連句の始りと未来 2

内田 麻子

### II 平安朝の一句連歌より鎖連歌の発生

一句連歌即ち短連歌は、連歌の発生から平安末・院政期ごろまで流行したもので、「内に侍らふ人を契りて待ける夜、遅くまうできける程に、丑みつ時と申けるを聞きて、女云ひ遣しける。

人心うしみつ今は頼まじよ

夢に見ゆやとねぞ過ぎにける 良岑宗貞

「春、良岑の義方が娘のもとに遣はすとて

思ひたちぬる今日にもあるかな

藤原忠君朝臣

かからでもありにし物を春霞 娘

『拾遺集』

ともに二句の付合だけで終わる形式である。

鎖連歌即ち長連歌は、長句と短句を相互にくり返しながら、最後の句は七七で終わる詩形のものである。

発生当初は「鎖連歌」と呼ばれたが、何句続けられたか、その句数は明らかでない。感興があれば何句でも付け進み、興尽くれば終わったものと言われている。

これが後鳥羽院の十三世紀前後になると、句数は百句で集結するのが一応のたてまえになつたらしい。これを「百韻」という。

この百韻という数は、その当時流行していた聯句や和歌の百首・五十首という定数歌の発生及びそれとの相関関係が考えられる。連歌百句を百韻ということには明らかかな聯句の影響があった。

聯句は、隔句に韻がふまれて、一人の詠吟は二句一聯でそれを一韻といい、聯句百韻とは二百句からなるものを称した。しかし連歌には詩のように押韻ということはない。即ち連歌百韻の韻の字の使用は単に聯句の転用にすぎない。

この百韻が基準になって、その半分の五十韻、七十韻などのほかに、百韻七巻の七百韻、百韻十巻の「千句」がある。千句には十四世紀以降の作品（主として発句）が「菟玖波集」に数多く見出される。その中に「一日千句」「一日二千句連歌」という例もある。又その千句十巻、すなわち百韻百巻からなる作品を「万句」という。その他四十四句からなる作品を「四吉連歌」と称した。

### III 鎌倉期の賦物中心の連歌

聯句には、その全句に亘って、隔句に同一韻字をふむことによつて、全体として一つの形式的制約がある。聯句の流行した時代に同じように形成された連歌の世界でも制約は要求された。即ち「賦物」である。賦とは、わ

かちくばるの意で、長句短句の各句ごとにある種の詞、物の名を詠みこむことである。

和歌には「古今集」の古から物の名の歌、漢詩にも離合詩、雑名詩という技巧的なものがあった。この技巧的な遊びをそのまま連歌に導入したのが賦物である。

たとえば、前句に雉、付句に海月、即ち鳥魚の付合であり、他に昼と夜、草と木、白と黒というような付合である。

「賦鳥魚連歌」は長句に鳥の名、短句に魚の名を交互に百韻全部に詠みこむのである。

① 一字露頭・・・日↓火 蚊↓香 名↓菜のように、同音異義の字を各句に詠みこむ。

② 二字反音（反読とも）・・・花↓縄 夏↓綱 水↓罪のように二音を逆読みして別の義ととりなされるもの。

③ 三字中略・・・霞（かすみ）↓紙（かみ）  
菖蒲（あやめ）↓雨（あめ） 桂（かづら）  
↓唐（から）のように三音の中間の一字を略する。

④ 四字上下略 鶯（うぐひす）↓楸（くひ）  
玉章（たまづさ）↓松（まつ）のように上下二音を除いた中の二音で別の詞を句ごとに詠みこむものである。

浅賀淑代

今年の夏は、早くも猛暑。

さて、今回は中川哲さん・凡さんの三ツ物  
プラス・ワン以前に頂戴した残暑見舞いに  
英訳の試みをさせていただきました。

身から出た錆もちあぐむ残暑かな 万太郎

五十年目を照らす満月 凡

外国の友と新酒に酔ひしれて 同

キタセクスアリス秘めて語らず 哲

(発句) remaining heat-

don't know what to do with

the rust from myself (M)

(脇) a full moon lights

the year of the fiftieth (B)

脇は「韻字留め」といわれますが、英語では「韻字」というわけにはいきません。せめて  
体言で留めてみました。

(第三) new sake

drinking one cup another

with a friend from abroad (B)

こうすると「大山体」でしょうか。あるいは  
次のようにも。

one cup another

drinking new sake with

a friend from abroad

第三は、丈高く、調べよく、また、転じの

始まりですから、「それからー」と次の  
句を新しい気分です誘いかけよう、と。

拙訳はいかがでしょうか。因みに、国際連句  
の実作の場では、分詞構文を用いたり、言い  
切ってしまうない表現を試みるなど、第三ら  
しい形や留めの工夫が試みられていると聞いて  
います。

(四) vita sexualis

he never talks (T)

四句目は軽く。韻文に限らず、日本語の文  
章は主語が省かれていても不都合はありません  
んが、英文(詩)の場合、(詩的)真実を伝  
えようとすると、どこまで省けるものでし  
ょうか? 例句では、敢えて主語を定めて  
訳してみました。冒険(断定)が過ぎるで  
しょうか。英語の連句作品では(特に恋句に  
からんで、he, she が登場するなど)指示語  
がよく使われます。指示語の省略はどこまで  
可能なのか、探してみたいところです。

さて、話は変わりますが、この四月、佐渡  
で米国の俳人たちを招いての連句交流会があ  
りました。参加した米国俳人は十一人。それ  
ぞれ、有季・定型を目指すグループ、また定  
型にはこだわりを持たない(あるいは、批判  
的な)人々、季語の有無にもこだわらない句  
のスタイルを持つ人々など、連句への多彩な  
かかわりをうかがうことが出来、おもしろい  
体験でした。いずれ、季語や定型のことも  
触れてみたいと思っています。

\* 連句と酒 \*

「酒器」

蒲原 志げ子

通ひ口に亭主が右手に銚子左手に杯  
台、引杯を持ち現れると一挙に座がな  
ごむ。一献頂いた所でやっと向付の肴  
に箸が付けられ口福に満足の囁きがあ  
れる。この場合銚子は注ぎ口と手のあ  
る蓋付きの鉄製が主に用いられ、金、  
銀、錫、陶磁器も中にはあるが何と言  
っても、鉄の濡れ肌、蓋に打たれた露  
の清々しさにはかなうまい。原則は共  
蓋だが二度目には替蓋として染付、青  
磁、色絵、織部、志野と趣向が凝らさ  
れる。この蓋(大抵香合の蓋)を生か  
す為に釜師に別注した等、うかうかと  
飲んでばかりも居られない。容量が二  
合強あり、普段も飲んべえの客には重  
宝している。爛鍋とも言われるが直接  
火に掛けず暖めた酒を入れる。始末す  
る時に熱湯を掛け酒気を抜くが長く使  
ううち、えも言われぬ味わいの肌とな  
りお宝の一品になる事を請け合う。  
何はともあれ一献いかが・・・。

◇ 猫養会案内

▽猫養会 場所 江東区芭蕉記念館

日時 十月十五日(一時)

正式俳諧の後二十韻興行

本堂 蟹歩

杉内 徒司

洪柿を京に運ぶや暮の秋 蟹歩

の短冊が玄関に飾ってあるので蟹歩の事を訊くと、紅夢は元警察官で、蟹歩は警察界の大先輩という話だった。

以上はいづれも十年、二十年前の経験だが、ごく最近、偶然の機会から「蟹歩・本堂平四郎傳」を笠野孝氏から御教示頂けた。

本堂平四郎

明治三年一月十七日 岩手県生 士族

明治二十三年 岩手県巡查

三十二年 警部昇任

四十一年 警視庁赤坂署長に任命さる

この赤坂署長時代、仕立屋銀次一味の検挙と乃木大将自刃の真相公表とが二大功績とされる。

乃木大将の自刃は、日露の役に二子を失ったための狂死と軍から発表されていたのを本堂署長は、明治天皇への殉死と新聞へ公表し、軍神・乃木大将として崇められる評価の基をつくったという。

大正八年麹町署長(四十八歳)で退官。

平四郎は剣の達人。又岩手時代から俳句・短歌をたしなむ。

山岡鉄舟に私淑し、鉄舟の諡おくりなの高歩に因んで蟹歩と称す。昭和二十九年二月一日八十四歳で亡くなっているから「藤の花」を首尾した折の三俳士の齡は、

蟹歩 六一 芦丈 五八 松宇 七三

◎ 次の方々は猫養会同人に推挙

されました。

椿紀子 太田けんのすけ

佐藤良彌 秋元和彦

§ 書籍案内 §

『東京小芝居挽歌』 中川 哲 著

青蛙房(定価二千三百円)

◇ “芝居好きの血筋”を自認する著者の、祖母の膝で見た「らしい」という中村歌扇の観劇以来の、小芝居体験がまとめられている。年一度の歌舞伎座くらいしか知らない者には、ものぐるおしいまでの歌舞伎執着である。次々に登場する昭和のスターたちの息吹が伝わるどころまで読む者をつれて行ってくれる。招魂社(靖国神社)の見世物が原点という著者の、小芝居を見つめる目は「芸術」に瘦せてはいない。庶民の楽しみに対する共感にあふれ、昭和期小芝居演劇の貴重な証言である。

(H)

根津芦丈翁米寿記念連句集『この一路』(昭和三十六年五月刊)の巻頭「藤の花」の左の一連が面白かった。

夜のうちに町曳きぬける石車

太るばかりの医者の身代

獨逸から三日目と云ふツェツペリン 松宇

(昭和六・六・十九 於 竜峡亭 對座)

「飛行船ツェツペリン伯爵昭和四年八月十日霞ヶ浦飛行場着陸」は小学校六年の私の夏の思い出にもなっているから興味をそそられたのだ。

少年の思い出はさて置き、芦丈は明治四十三年伊藤松宇主宰『にいほり』誌に参加して同人となり、昭和七年同誌の経営が他に移ったため脱退しているが、当時小石川芭蕉庵在住の松宇が蟹歩を誘って伊那の芦丈を訪ねた時の三吟が「藤の花」なのであろう。

同じ頃、『昭和新撰俳諧七部集』を企画していた池田豊城から見せて頂いた予撰稿の中に蟹歩捌きの歌仙二巻があったので、蟹歩はどういう俳歴の人かという関心を持つに至った。豊城も皆目知らないとの事だった。

それから数年後、都心連句会創立者の一人中山紅夢を訪ねた事があった。

【Q】 根津芦丈先生と初めて出会われた頃の、芦丈先生のご様子や印象はどのようなものだったでしょうか。

【A】 私が芦丈先生にお目にかかったのは、昭和三十六年九月二十三日、先生を信州大学にお招きして、連句について講演をお願いしたその日という事に一応なっている。しかし実はその前に一度、松本から伊那まで先生を芋庵にお訪ねしているのである。正確な日時は記憶にないが、恐らく三十五年の頃だったと思う。その当時、私は大学で西鶴の研究に没頭していた。西鶴と同じ談林派の俳人野口在色が伊那に住んだ事があるので、何か在此について教えていただけたらと思ったからである。芦丈先生の存在は同窓の宮脇昌三さんから聞いていたが、その当時は連句には関心も興味もなかった。芦丈先生は蕉風俳諧一辺倒、西鶴などは邪道扱いの方であるから、ましてや在色などには興味もなければ関心もなかったのは当然であった。それでも部屋に上げていただき、一、二時間話をしたが、考えてみれば不幸な初対面ではあった。先生は小生意気な若僧が、在色などつまらぬ者を探ねあるく事からお気に入らなかったのではなからうか。手をかえ品をかえ何か在此のことを聞き出そうとする私を無視して、終始一貫、

芭蕉の俳諧、ことに芭蕉の心法を説かれる。それも伊那方言まる出して、先生の講義というか、説法というか延々と止まるところを知らなかった。おそらく大変重要なことを教えて下さったのであろうが、その当時の私は芭蕉よりも西鶴が大切であったから折角のお話も全く馬の耳に念仏であり、究極の印象として、頑固で旧弊な老俳諧師の見本を見たような思いであった。

このように芦丈先生との初対面は不幸な結果に終わったが、この対面も後になってはお互いに有意義であり、私としては最高の結果をもたらす事となる。

それから一年ほど後、当時は伊那に住んでいた宮脇昌三さんから、芦丈先生を大学に招いて話をさせてくれないかという依頼があった。これからは私の推測であるが、芦丈先生がそのように事を運ぶべく、昌三さんに頼まれたのではあるまいか。過日つまらぬ在色の事など聞きに来た若僧の目を覚させねばならぬという一徹の心と、また、連句発展の為なら何でもやろうという不拔の精神の持主であった先生を考えると、どうもそのあたりが本当のところではないかと思う。

そして、その講演の結果、私はもちろん、故高橋玄一郎さん故池田魚魯さんなども一ぺんに芦丈ファンとなり、その日のうちに信大連句会が結成される事になったのである。

◇ 猫蓑発展基金ご協力有難うございます。

五千円 フェイ青柳

六千二百円 速水一雄

一万円 島村曉巳

(敬称略)

◇ 基金の口座 富士銀行新宿西口支店

普通3376045 猫蓑基金

.....§.....§.....

あとがき

○ 七月初旬の早暁、新宿の七丁目、木立の中に夏鶯の声を聞いた。二回聞いたから夢なのではない。都会のまったなかで啼く鶯に感激すると同時に、季寄せのベースにある生態系の変化、それと、これからはこうした番外編の鳥たちも詠まないわけにはいかないんだなと思った。

○ 鳥だけでなく、気象もおおいに気まぐれな感じがするこの頃、皆さまご体調崩されませんよう。

季刊 「ねこみの通信」第二十八号

発行者 猫蓑連句会

編集人 千一九五 町田市金井6-7-6

佛淵健悟

印刷所 アトリエ・Neko